英乃一露　うつし見

貴 12
881
4

空蝉　帚木巻並也

巻乃名同並の事　此巻ハ哥をもまて名とす也その

哥云　空蝉乃身をかへてける木のもとになを人か

羅乃なつかしきかな　並の後ありといふ浜松ホ乃物語の並

も横とむとは後この物語ハ横竪乃二あるへし先ん横と

竪といふ事を唐白ホ此ことを横へつゝある我横といふ

竪乃並といふ事も同代の事を本体ありつき又前乃巻を此

ふたとを一心ともうきてかきるを竪並といふり何まて此巻

ハ竪の並也又一巻乃中に始も竪ふて後横ふるも之始

を横ふて後竪あるもあるへし一篇にて不可皆定之乞

然列此物語ハ全部大略竪乃物語と可二意得一也

巻名以哥の要之兎しひの横竪乃ちう河花よ見しまり

此巻ハ帚木の次也竪の並なるへし帚木巻も一巻

にたへきこゝろもなしとおほしけちつゝちくさ巻々にみたりかはしく
又一巻のうちに横竪をかねたるあり恐る盈乃みす史記(シキ)
乃本紀(ホンギ)の外に列伝(レツデン)をたてたるにおなしうたへきを
様くさ絡をぬきすに　花　巻八第本書此物語の詞なり
けしきくらゐなといまさら中将の宿にとまりて紀伊守家
かなかなりけり　細同之
我もかくてはかくまれてもありぬへきものをひかおもはしく見え
てうしせせとふひたるをぬれたる　秘　源好色人とみえたる
細　源氏乃好色を自称(ジセウ)し給也
たらしうてありしぬまし空ておもひたりおもふ事ともの給
を見　秘　小君にこきをせまはせたるへし
海をと内へ出御しあるもてなしたらしかりしと御供せて
宋　是ハ小君か事也次乃詞ハ小君か空蝉に仰らるゝことあり

うすをかくり
よはく見えの御そくちいさき紀伊守のいとおもく頼みけりしを
わひの御かたかひそかなるをとふひたれしみや御うちみれあなと
こ君かありける空蝉乃すきさまなるもの御をとひまよく御
かへりひたる也
あれたるみるけしきひきとなとよしなきことも人にすなるをは見
さとるとふらん　宋　聞よらんのな也
ふあやしに紀伊守はしきおもりけしつゝ　秘　空蝉の心なるま
ことふきられ御とまでけしきありしとかくの給をぬを
紀伊守まし紀事也
まいのやうなるとの給ひかつきさけ敷ゆくそこ行人をはすハ
御といひとおもしくさたりくしきおさま　細　源のやうにとあ
ことも其まいるもはなを纏(テン)也

女とかくあはれかりつゝしも思ひたゆませさりしこと
なましてなし打解しなきに有るもさすかにも　抄 源氏の詞
るすかと空蝉乃思心也　細 空蝉をわすれかねて詞(タヨリ)
絶(タヱ)ともなすれよと給もてらに打まかせたる也
やうてはまとなくてやみ給ひなむ御心
抄宋 源氏の空蝉よんをうとをそめ給ふに清心のやうそうけ
ろひ給ひて立かへりて空蝉乃源氏とはまとかくなし
給んとの心也　細 空蝉の心也給ふやうくに思ふ也
抄又 うけまこの心源氏乃一夜の情そのまゝにて絶(タヱ)給ふへう
にてやあらんと也
志かていとわしき清有るまひの事とも給んと
細 わすと清給あるも空蝉の事納に両用ありと云也又
清なうそくの事ともあらんと細(サイ)なれやとにうくみ我見

そはまたるてもてゆと思ふゆとも也
うるてあるへし　宋 又それは思合給んと称する事也
よ紀得とみるくかくこゝろとらめてんやとみちのつくたてなきう
もてなすめうちおもりてえんつきるすしもわすれなかく
ていとやむまゝう清心すなわちへまきて打得しけるく
細 うくて絶をてあらんとおもへさて又給ふとのまま給るとも也
抄 かく給ひての給うことに人乃もらとは給ふ紀得とも云也
小君よいとはうらうらもと　細 小君をと相縁(タノミ)也
う納ることと抄得ゆえに志かてとひうへををと心うつらも志うるさく
もよううしさとも給ぬ事紀わりをろへく　河 慨哉(ウレタク) 慷哉(ウレタク)
以上自抄紀　小君よ抄得をとらうて詞也
さきいめまへ空たまうれとの給ひわたれも　河 将計(タバカリ) 或(アルヒハ) 方便(タバカリ)
見つくりすれとう給ふくこゝろみての給ふ事給ふ甚かう也

しら露と光りわきたる光にかはらんわか思ひにとかくち
かゝるに　源氏の君は詞をうやまのみならすちかくハセ
小君ことはかへしたる也　細　小君よりもかへしありから
めしよせ侍るハ御轄しとなくてそへ給へきよしを
給ひ也
このころみそかにすまひ給ふと　紀の守にかたるへし
女ともの心やすくれは　宗　萬葉に思薜とありなをのか也
夕やみの道たとくしきほどなれは
一品 夕霧ハ名をとくし月待て御車ハ我をこそ此間みちとりん
我車みてなきる　小君か車に源氏ともにまうしは也
このことわきたるをいひあかんとおほしとて
細 源氏の御用心也
さのことは御思ひのとむまするそそれハこゝろをとるへきと

かこみく門あるとさしぬけれはいそきたまへれは
いかならんと思ひおほしをそ侍らはあつてとりえたまひしと
まかり侍りきとのなる也
人のみるところさへさりれぬわらはしそてうちはらふ
ましとの井人なるともとたにんのまほいそうをは心やすと
し　宗　見んとのみて狼とも見えんとおほすなるへし也
ひんかしの妻戸に立てたてまつりて我も南のすみの間より
かうしたゝきのゝしりて入りぬ　南のすみの間　宗　是ハ
かうしとよるなるへし
かくれあるまもなくかくふなり　孔　小君あけてかくし入
かくれたる入と女房たちなと人にはかりしれる也といへる也
細 小君かはいりたる次の宮ハ酒しまた也人もり見んとても
思ひたまふとも女房達の言也

なとかうあつきに此かうしはおろされたるとゝへは
細 小君か云也
ひるよりにしの御かたのわたらせ給ひてこうたせ給ふと
いふ
花 伊予介かむすめ紀伊守の妹なる也空蝉のまゝ子也
彼家西にあたるや 弄 細同之
いかてむかひゐたらんを見んと思ひてやをらあゆみいてゝ
すたれのはさまに入給ひぬ 源氏乃御心也
此入つるかうしはまたさゝねはひまみゆるによりて
宗 前にかうしはたゝしといへとこのかうしハ格子さゝぬを
ことをしるしたり 細 小君か入はる妻戸也
にしさまに見とほし給へはこのきはにたてたる屏風も
はしのかたもおしたゝまれたるにまきるへき几帳なともあ
つけれはにやうちかけていとよく見いれらる火ちかうとも

したり もやの中柱ハ 細 是ハ源氏ハその人を見給はす
ちかく西のかたへ給ふ也 弄同
もやの中はしらにそはめる人やわか心かくるとまつ
めとゝめ給へは 花 空蝉ハ西むきてゐたる故にそのけを
よく見給はん故にてもちかくへ入てそのさめる也といふ
細 是空蝉也
こきあやのひとへかさねなめり 宗 女房の装束五月五
日よりハすゝしを二つかさねてひとへきぬと云
又こきあやをきるへきこちなるへし河海にこきハやきと
紅といふ花はこきハ宗には濃をこと云へハ河海
乃説不審なり 花 女房の装束五月五日よりハ花と
色かさねとてひとへ二つを重てかさぬる物也
此時ハなにゝかあらんとあるハうへにきるものをいふ也

こゝに紫は深きなるべし河海抄にも紫の色とよめるされ
ばかゝるにや見侍りき　細　花紅葉なるべし
なみ／＼ならぬ色にそめてうつろふはさやうにちらぬ花
人の物思ひする紀もとりそへてよめる歟　色といふ心のうつり
うつろふをさる人あるべし又紅葉は紅に染むるなり八寂
みといへる也　細　一しほかさねの上をうつろふと云
紅葉ともに只紅葉にはうつろふとは見えぬなり
わけるとをもしむるひとへ花とみえわたすとみゆるま
しうきてちりぬるも　細　空蝉の身をかへてける木の下に
しほさきやさくみえいつうひきかくしきぬめり　細　甚と
うつりにもおもひちるべきとも紀ほどに朽ちく
をとなり身をわすれぬさ也　并同之
いまだとをとをひんしむさきみえぬの露不定くみゆ

細
紅もの裾や上つ衣のかたとみえて色はとに東向なる
によるとはなくみえとうとさまぬ色し
さるとゝうす物のひとへ色は　色ハ夏乃装束なるべし
紅さあひのあうち紀上川物　并　紅（コウクワ）花とあるをそれとよ
て深きと二藍（フタアヒ）といふ二色とも読　一説同
一藍なきうひとも紅さ色ともいふあれしる也　細同之
あいさまのうきうして　それうす紅への色よくうすきも紅
色こきある様也
されるみ乃ちし引袴へるとさもまそむきのあかきに
袴（ハカマ）乃腰（コシ）也
さるうそきちるまてちりしたるを　紅さうたにてうつくし也
さるるの様也物すぐらぬ也　細　侍側（ハウカウ）あはせもちる心也
花　蜻蛉（カゲロウ）乃もをみとしい細あはりみ合せ料紙（レウシ）にすべし大方

ハ物くしうしぬ心とみえたり　河海に傍側と書て
はらたゝしきなるとみゆるおもひかけれハ如此彷徨ス
おひろきなる人をうちやすらひてさまくしくもはかなき事へしと
細　河ハ傍側とて死ハ絶えぬ也みえたもとしくはかられぬる
心とこゝろえても傍側なるとよれ色傍若無人乃
ふるまひなき色もなく程ふるまふ心なるべし　宗　ぬかし
いとえいかなりしきにはかへし此ましくして
たにおもひしる也
そゝろかなる人乃しらぬ所さいは此物おもさやらたにま
こ　そゞろか　宗　もとしれぬもの也それ程也　細同
ふらつきかといふおもひ物はさきれやうなるかたちありとこ
色いとあさやかなくハ何ともねと　あつさやうつき
孔　おもひくとて人おもひよれたるうちや

ゆるもとかゝ乃ほとつとすゝめきに　ゆかしも　孔　色を
三川よよめきしはをむかしよりとかく髪也　弄　ゆかり
なる様也その字濁（ニゴル）　祇　又云葛の葉を同じ色と
細　さうととなる様也
もちて物らもとなる下かく物しき常なる人と見えまし
物ちも　よくしぬも下かくハかれ也　細　おしれ下ちなれ也
むくそれやのかふたくれもしめもおもしく見んたまふ
ゆらそ　あとも見たに俤なかり世よなきれ物よおもへんと也
細　物やるとて一ゑん思ふるハ人さしむとめとてそおもふてめと也
あ紙ち云へるもとこへもやとおもと見んある　弄　人の性
たをそしをたる相也　細　人ハ見んさ海なるもハ用ことあくとう
物也此人をはかるきられるとこ　ふるも也色へいへくとし
あるもちてたへいれとも人の性乃数也

かとす紀ミもあつまりし碁うちそへて暮らせしとやうなと
栄 静かなる人なきれども一廉(ヒトカト)はある人也 細 一廉ある紀やう
みそちあまりの紀也気色も捨(ステ)らる紀とや
心さまにかなひて 紀 さそくうなとおんちるさの様也 紀との萩也
さたちくやけうらまをは 紀 いそらりしく物さりしまさ様也
わく紀人はいとさしけふのとめてまちえ給へや 栄 空蝉なるへし
新 奥のかたへむかへるへしとて一藤位めの又有と見え
花 此時源氏のかいまみ給ふは東の妻戸のもとに西向にもやめて
給へり母屋(モヤ)の柱(ハシラ)によりかかりめるへしこそ空蝉也と独は東へ
むかひたる故に紛ならすみの西の障子ありて東ならぬと
みえしは母屋の柱にかくれねはかみたるさま西へむかひけれは
ろてもうちへかへりし西はわかくれたるあれもむかふさまを
とらへてわかくのへとはいふる也西の障子にても奥にかゝる連

奥とあるをたにみゆるはをもしのかたへむかひさうなる故成へし
細 空蝉也座敷の奥なるへし花乃繊不審有孫同之
そこはちかくてそれをしめ此わかるかの方へとそえたると見えと
地なりて待也花細新孫同之 他地可総ミと
いそこのさひはもの奥に有り 新えの荻乃詞也 細同
もとの所へかそくや 細 源氏乃見給へる行の様也
とよひとうくめてさるとてもみそなふるとかゝるのはや
栄 十(トウ)八(ハタ)三十(ミソ)四十(ヨソ)也
碁のゆきをとも云とくしるゝ物也
宮に此詞面白し碁の家の者なる我也故にあらとその
うれまにふるゝ也
雑藝(サツケイ)のうたひ
碁打乃湯の湯きさいふさいよさやうちとやすき人まとや
うきかへはよまさかやそうしやまとへきろしやなと

花
六花集に古今とて出たる伊与の湯の湯けたの数は
左八右八九中八十六となむ云て式三あれとも又雑藝(サウケイ)に
湯けたは十六ともいふ又素寂(ソジャク)か説には湯を
たの数五百卅九といへり是も一説に相違せると可尋(タヅヌ)
数之(カズノ)又伊与守か任に有時也面白き伊与の縁なるにて
細 数を伊与の事にいふ也と父の伊与守へ下りたる所
なる也似あひたる詞也
雑藝乃哥女房に見えたまふる也 抄 湯の中に出る湯也
伊与なるの女なれはこそんなるへし
まとろまれぬとられたるを 抄 是は空蝉か彩色の萩
尽(ニナ)とられるやうなやうなるのを守るやうになれやうとのと
めさまたしとも
女とあるすくらかひきさやうみたるゝみをねと 栄 袖なると

みくるしとくくしきなる様也 空蝉也 細 空蝉か事の様也
めとしはとつま経へれはとのつらしさもせたにみる
栄 しやまそめ字のあるへし
めまとこしくれそ我心ちして 抄 ひとつも目あるとさやう
なる物也一説に晴なる心にいへりきこえそう花様なり
されとも一らん目のかす所の鼻(ハナ)なるともあるさやうにたえく
末摘こうくたよのま所とはまたその詞にて一度(カハ)めのま
からぬかしたに可有なる也 和花 鼻(ハナ)ひくき也 細 それ
あるは八晴也とをいふるなる也又八目乃ふのあるさと
云也云と此事可細見
それなるとも何さやうなる様なる 鼻もれきなうくらなきや
抄 おなやうなしれと是鼻のきこえらぬなし也
猶ひまてみやりつきかもしれ 鼻たかくらぬさ也

といへる詞也
いひよられたる程さまよう侍るうちとけてゝまては
あらて　空蝉もよろしくぬかとられと返事とのま
てをしにくゝみゆる也　是又人の教也　孝細同之
かくさま侍る人ハかやうなる心あるへからめつゝ色にいてゝし
ならぬ　軒端の荻也うちみる所を空蝉みとしまされと
色深くハ聞ゆる成へし　細　軒端の荻也うちハ空
蝉よりかたちたゝけりたる也
みえたらしきあいさやうはまなかりしきをると心よく侍
ころとくにうちとけてまらひるを　軒端荻の事也
細　是よりハ軒端の荻の事也
うけるれと自ひおほくかんとて侍るくたいと打つきさへの
さ夜あり　そらかられと　宗　侍れさる術也

さりつれなる也　後悔の女説　ほころあるは也
花　あさけきしき八おほしあかつ　孔　あひるさしきけなる也
花　けしくきさハ人の心浅きといふへし
まめなかしぬ給へるこれをけうりもあかにまほしかりあり
宗　源氏好色のかる人を定ちかつぬ侍んつゝ也
見縁よりかきなりものゝ人ハわりなきをそゝる世あかし引はくろひそても
めゝるうさくくとのこゝそ見縁へかうちをきめる人のまさ
也　孔　源氏まこんとしゝいけるる人をなみなつくろひくうさく
人をも大略ひきはくろひさる比のさまん是を主のかちやに
かのわくことそうわもとゝみしなるへと也　細　源氏まこんとしきてか
うちとをきくしのかるへとういまうさしのハちか比はとに
と比ありけるとやめりし見縁也
くいまさちるとハまゝしし給ハさるかとはるかるかるか　宗　垣間見ん

閨　伊予介女

なふ心ちうさやうれるハいとわりなしちうしえしうなくまへ
ふかりしに　於　新端の萩乃なる也
小君いてくるまちまれハやがてしおはしぬ　細　小君かいてくるを
しさのまゝ迷はしこそのまゝなる也
わさとのうちくちに物語へり　細　萩の君ともしわ戸口にて物語ひ
しやうにて小君も人々しつる也
いとかうしてゆきちいひく　細　小君か云也
迷はれなしぬへ伴りて思ちうとなる也と候へハ　細　小君か
詞也新しの萩乃あるといふ也
ゆくちうひやう色してんとせるいとおもふまゝうかしくく
こそあたれとの給へと　細　源氏の詞也
あさてうあつるにゆくと候なきともう候なんと申也

小君詞也此人のゆくしめてうなるんさと云也
宗　尼乃清水のこゝろとさうしてとこ云也
ゆきとなむしうしへさもしたのミそハゆくしあつしもちなれとおもふ
人もへのこしこうつくへく云いままる紙とおほせなりおも
碁うちてはてるやおもんうちそこまめくいうしてくく
あるゝおもてひちとをとなる也　於　小君まうそうんと申
せちう待して思合てはめ給ほんのうちも
細　源の心也わさなをれともたのもしさとも
小君ハゆくにわうしまほあるんこの清うしハゆしてんせ
てなうもとなりけり　小君と女房達なとうあゆる詞也　細　同之
まいまともなりゆるてゆくもなをうれとの給ふ
かんうしゆしてまつまゐるさ便也　細　源乃詞也
このまとりまうとの心をうとうむにあくまめかおしれそうひ

あさせんかたなくてくもくれなりけんたゝあたにいはれなましくと云
ふかゝりける也　細　小君もとゝうかぬ打云ほとゝ云也
紀乃かみのいもうとものあまたにあるつゝみたてたりいまゝてやもなよ
やの給へと　細　源の小君ハ新たの荻乃ゆふを問給也
いふてうけたまはらんかしみすれ几帳乃へくゆたしとてまゐ
細　小君か心也
けり　宗　小君か中に源氏の御同心ある詞なへし　几帳立て
あるまゝにさあらんとのんも西のかたをは給ひぬるとく
小君ハまたへもいとも　細　源の詞也
内ましもやとはりさをひきとみ門と八たちかへりしと
わりてよふけぬものえよとなきさとの給ふ　細　されともよ
きえん給ねとこ給也
こゝひつまとときてそりかみの人く上かきの給にあり

いつ渡也又あらは此渡とうきるむとあり　宗　小君かさ麼也
はゝうしくちよまち給ハ給ふさん
風吹とはせとて
六條　風吹とへそれひらくとへはしはきんと君かひてものと
まうこ給ろきてあけてちとんしのひさしにいとあまさ
給ろへしと　たてこひろきを　私　屏風のや次の詞よみ西　細同
ちるちゝるにいるとそろきにいるとて帰りぬれと
かれは妻戸にふと入とあきぬる女ま々あるへしちかり　私　小君
とさうもとふも　細同
かきうはとそしね一もし人あろきうたに屏風をひきけそをを
ほのかなれたやはらかなるうちそとこゝのまきさゝとゝ
こそりかけはたにいとはしまれんとみちひくまくにまやの
几帳乃かたひらひきあけていとやをらいり給ふとすれと

みなさいはまゐる夜の法えのきぬひ
也たるにと　宗　忌意をとりて重ねしめる也
いふは孫にしまかしき　細　いふと思ふ別かれく接ひ
踏源氏の心まちひ打まひやうとなりぬ也
やまとうなるよしをいとなるうきなり　孤　優になまめかし
さ様源氏ハ人なよらかなるへし　細　源の優よあまめかしく
さいひなふ人なまめとなるさ夜のうちなるへきとも也
女さへさてこ宝を経ふをとりれしまたにさひなるまと　細　空蝉の
心也此個と源の心えをさもふをもしけれとハ指す人とみさ
もなうに忘るるへきよし也
あやしき事のやうなるにとと心もとなれ侍りてあり給ふらるま
て　孤　前は源の一夜まかとなりてきしと也
心さらきくめるいふたに打しまはあん

拾　君か家の移花の枝ハ心ならまたえるいとに移して出まいと
白扇ハなりかめりるは移えぬらるれハ其なし哉まあめといと
るまく　あまもしきよ甚うちつる君かひハこちなりふといふ
めうさうちなるしひて移なむるよ　孤　夏なれハまた其な
らぬといへり
桜花白き物うし落されハ木の枝と物と打まかるるへし
紫式此玄のん木叶え　謙徳公集云女の事也
秋をさめひろく詠まるるされて其ハこのめそいとあるらむ
此事姫絵まん也　いとなくハ云籠也
哀をとこうしやもあは思ける事とう後のいとなりるとん
白晩のてゐといとなく事ゆりは折り香にあれとも成なり
細　ようえんさめなるえ詠此事絶けつり
わうさん人さを何心なくいとよくまかせるとそなるへし　宗　新そ

の萩乃下葉也
うつ蝉をひろひとりつゝもちかへす 箋 源氏君の
様とも空蝉乃こゝろ也
うせミをおもふるに 細 空蝉也
思ふへうちつきをかはさらやうのもとよりてきれとちらん
し給ふさうるひろき首ひてとあるしあさましくおもひそ
ともかくもとひわけ侍らやとかうおもひ出く 抄 まりのかるゝ
ら二字ある人こと更なるれしひとへやうなるもの
ましくしるる詞ひとつのやともおもふ心そになり 抄 なるて也
君を入給ひてちかしひとつにもかよふ心やはらくおもひを
見とゝハ空蝉かと新たの萩乃つくるとふかし源氏乃
んや 細同之
ゆかのうへにニ人ねたるまてぬしたるこのぬとすくしやりまても

行くるにあるしをそのひとつとハ身のつくしなき思はゆるまて
細 空蝉よるとハ抱くしさやされとも引つくてハ思ひかけたる也
おもわりしもようしもてう 細 空蝉の身のまたるとハまうけぬ也
いさしころやれ待ちくるまとそおやしきをうちるまて 細 空蝉り
うちるまとたる也
やうくみんおもしろう給へ涙ましくいくやうをくうれと
細 空蝉をはらしけるようしとみえ侍らさぬ給也
人さとくへとたとるまてみえきんとてともめしくおやしと思ひ
抄 人さとく人こゝくあるや作ありんとも思ひれた空蝉よ新しく
ろうし給ふとのうちくろとあまりしいくせんとて西のか
たと新くゝやうに思ひれし行きぬ也
はいるへ人ともうつくしとうちすそものつ新くんあめれとひ
るく 細 見けとかつ身とうとゝそてある心ちかしきとく

主人のやうにて空蝉と我くと又何の後をうくりて
わこう由しつる人のことも
ところにしも相見し先とおほしを　花　空蝉のわろくとふん返
うのわろしかとけうほうもとあるうちへてせんよわかりなる
と　もみつるしをおほしきも
花　わ君の萩乃事也　細　基うち時見苦し様なり
ところさ清んあさくみめなさうし　細　草子地也　批判也
やうしめさ也くいとおほしもあさましきにはちられある
はのかにあるくいとわしきさうふとるし　わ君の萩乃を返
なしきみる　細　わ君の萩乃様也
そうしみさぬん也
世中をとまることひちてぬほとよるを八清也しとあるふさこそ
孔　もやみまく人ゆとあひさるやうにおほし行とも

ゆくゑもとひことのれ　孔　わさなかれしともるれ様也
細　まことせさとこそぬ人のやうなれあんなるを何に成て有也
我とともしもして相すかなもいつつて我なるそと後
よ思めしたんと我なとめみことゆとあしぬと
細　源のけちためみを我ともしをしてよう人こさを折
それ萩よ空蝉よん清しのあるみとくいまてれいしとえて
でんかとめふあしう後也空蝉乃みのかにけしきまき
承とわりしめもて様也
はのほしきくのあれうちにせとつしもたもちにいとわし
なれも　孔　空蝉乃事也　わ君の萩乃心のうちそ源氏ハうや
うふことよりもあるうちを不審をうるとも義清たるをを
ゐるまうしぬと空蝉のつまりしなこ所をいとわしなを
母わりしめもをわ君の萩よ我とハ志しまりしとふるせを

荻とのはまさらぬ人ゆゑとも軒端の荻に心をかけ給ふやうに
いひなすと也　細 空蝉也
まひろくのほうさまくに事つけ給ひしかとといとさよふい
ひなすと也　細 夜との程は遠と軒端の荻への思ひ給ふ
也いひなすと也
まことに人をも心ほとけへされとまさしいとわりなきちちに
抄 物とも御ちりほとの人なるまじき也　細 世に知らる人
空源氏の御ことをもさまあるましきをとさる
ゐ見物とも也
行しるへするやうなれととまりしをといひかへも　箋 うしろめたや
うちもれとの也
みくしとをもあはれとおもへと軒へさ故ともまぎれなかしく
細 軒端の荻を源の御いひしう也

ろをかのされされくの心とかくかはりたにもひかまさ
見くらくもなしをいひおさしんかくたすひきくをあうす
たれ物ととゆきりほうしを　箋 空蝉乃事也
あやうくにまされりとひ出し給　細 とすともかくても
三給ふぬ也
このいふくわやうなるをといひを尋ねられなれともさ
もうにあさましくしを好りとも給ふ
軒ゑ乃荻のさ夜也　細同
人まろとも軒るのすかとりやうなるは何まれそふおとこちん
細 源氏の軒への荻を乃給詞也
むかしの人をといひあるあひといひ行へよはしむかしとなれたまし
をあいしねた　抄 古といひ来ける也の給也
身あらし心よわとえんすらいまもしくるしんみそける

細 源乃親方とりなさことをあるとや
又ちりへきんへくとゆるされうしさうりもくむりいてくちん
宗 侍るめ紀ちるとうるや　細 親子とも我らハ極るされし
物とふるや
正ましてまうち給へよちると　宗 撫子うちとまたる清詞也
あ給くしなうてしめ給　宗 あると思りにょの清ひまたふ
心も心ハあすや　花なす給さるとよのつゐにかゝしぬんなる
あしるとんへとよの清ひろんへといふや
人乃ちひ給んことのとうしきたあんえ中のことさすまし
こさやうしともくいふ　宗 新ての萩乃詞也
ちんくんまゝしもいてそあしめ　宗 源氏の詞也
このちいさたうへあるとにはすへてここえんもし　たゝなくも
てまし給へるといひとまて　孔 小君みく你うまえんとや

かのぬきさまへしきるう返事をとらせて出給ぬ小君ちう
きふしさう給ハうし給へと　うま事　孔 空蝉のこと成
あしもへしめうハぬさきまへうしきるや　細 同之
うろめさうハもひて給をれハあまとおもろさぬ戸をとや
とうくしあく給ふおもてるあさちの心ふくおもひハさ
うやおもろくしきとふ　細 心ようきていひあるはるや
まつりしなて　細 小君乃思也源をなしたてまつり
て出るゆへ也
るうちやいしう　宗 小君乃我ことを答也
御中にあそあそあるとうきも給とはしうるさく
弄 小君とはうしや云気　細 はうしうるさても　孔 弄に同し
やうまへく　宗 草とのふ也老たるさてちうく侍るへし
いとふくなてあし侍まてもへいつるそとて君をなくし

てきこえつるに　小君か詞也かるらかにおとなひぬの心也

細 小君か心也あしき事ともはしらすと思也

あかつきちかき月くまなくさし出て　栄 並ふよ名誉

此かたる詞乃次第面白

古き人の影見えけれは　栄 源氏の御影也

又おはするはたそとは民部乃おもとなめりと

細 此女の云也云ともいへとひとく又民部の侍はかりと目

見咎たる也民部のおもとゝ云事をたけ人なれハ常

にわらはるゝやぬ此けり　花 民部の杖のおもとくおもきか

のうちたる也　私 此次小君の詞なるへきを民部此おもとを

おめりと庭（サヘキツテ）ゟいてたる老人の様なるへしまた小君

又云事もつたるへきと面白けり

申しかハあらぬおもとのたけたちありといふ　頭下を

けしうハあらぬ也小君か民部と同しくしてありくと云なれ

也おもとハ女房達の惣名也　河 侍者（オモト） 白氏文集

御許（オモト） 彩（サイ）襟 彩袍 和泉式部か童名御許丸といふをも

つほねとて おもとハ局（ツホネ）なるを云なるへし　花よ力んてもをも

たけたかき人のはしたなくわらはるゝをいふなりけりを

細 たけたかしとて人の常にわらはるゝ人也

おいひとこれをはつれてありきけるとおもひて

細 小君か民部のおもとをはまてありくと云也

今たゝいまたちならひ給なんといふ〳〵　細 此民部のおもとを

わかせいほとに小君のたかき人と云也　栄 小君をいひたり

民部のおもとゝいふ事をもとして御なかりけんと云也

これをこれ云するをいひて　栄 老女つれて出来る也

まうしけれとえとらへさせて　栄 源氏乃君の戸

よりこそひ行ての心也
わさとのことゝもおもひくらへられこそ給へれとも此君を
世にはしられ　細　源の三ゝくれ行也
わするゝ事なくひたすらおもはせ給へる　宗　源氏と花
女の氏うれ物せくらぬ事はなくてもてなしたまふや
物とくひのかたらふとやうにてあいなきことゝもに似
はるけ人をしのふのとこにてめしよするものかなし
うちあることを思ひなましをなんとう給ふ　宗　花女の機を
まつしぬとの詞也
いふへきことにておほうしとやれんとてもたえぬるに
孔　わすとの事をとこそおほしいふやるといふ積也
細　此女いへ色をとこそはれたらくはならいひくとも
いふへしいわる也

かくりして出給ふ　細　源の此をみよ出給也
右近か方へ行かんとさいつ給へしをおやうるゝとおもへとも
細　草子地也
ゆるしも給はしありぬ也し　新　心うれなしとも也
二位君清車のあるともなかしろ也　孔　あるとはうしろ也　前に乗給
小宮殿とそ
二条院にはわりしもぬおはしける御給へ給はさなかりしを
世にしらせ給ふ　孔　小君かわさるものに前の
時宜ともおしくえさるとてあらけ給詞也
あれ人のこゝろをはかりしさとしけうこそ給ふ
孔　物とはよくしらる給ふ也
いとわしうて　細　小君か事也
物も申さん　宗　小君か迷惑して物もえ申さぬ也

いとおかしうつくしう見え給へるめれと身をもうらみしひしそてぬるを
うちそみつれとも心つきなしと人もこそ思へ給ひまし花
孔　源氏を空蝉の心つらしと給ふとの詞也
いよのすけに似たるとある身をそねたしとはさるべしと思ひ
ての給ふ　細　源の詞也いよのすけをみてし給ひたるにとふ
ありはてぬこころつきなさはかの詞その本にふさはしてゆめ
とのたまふとこ君をわすれへ給ふをてより給ひてまつらむこの
つれなきかしこき給ふあこハいかにそれをもれとはしくきこゆるなにと
ことそ更を　細　心ものの字をも面白
思ひつ給ひまうしうれと　孔　小君を空蝉の心はしくきこえ
ひるまし給とのつ詞也
ふめやたの給ふ紙いとよき哥しさも思ひまさしうちかは
え給へと給ふよ給ひはにもうとうつかめしてけしきも

そうち給ひをみてあそてたくまるにひのやうにおもとさのもの給
空蝉の身をかへてけるこのもとになをひとかたのなつかしきかな
孔　せみのもぬけをするとみをかへてそいひつくハせみのから
にようそくいひつ源氏の詞也　河　空蝉（モヌケ）ハ蟬也文選ニ蟬（セミノ）
蛻（セミヌケ）とかきたるも一説に磬（ケイ）蟬（タ　ケイセミ）ともいへり蟬の色磬（ケイ）石とうに
よ似たる故也
細　うちてくもとならはへつけもなきなるまたまとも秋を
まつる　うつせみハ蟬のもぬけをいふ也又万葉中ニ大（オホ）
君（エ）三山ニ銃よ虚（ウツ）蟬（セミ）毛（モ）嬬（ツハ）乎（ヲ）桐（アレ）搭（ウツ）良（ラ）思（ニ）吉（キ）とあるはもぬけを
にあらすはかなきさもかよはすと文字ハうつ人字のかりう
けらしき故也
せうとはへるとかくろるに引いれてまるを　細　小君かことを
いふる也

うらみへもいふにおよばんといひけれと　紀伊の妹なるや
やうくねいりたるなりて消息とつきとちすしのうとさぬき
こゝちさのいとあかしきさへたにあめるを　小君か詞也
かところは引くさされとも西のまへへはこしとらへてかな
しまかたを空蝉の人は西の方にわたるをかはんと移（ウツリ）きたるや
あはひゆつくんか消心移されとや
まちくるしくてみんかたなり　空蝉のぬきかへし衣を
源氏は孤（さ）語也
小君かこたにいさゝされともあらは見あらはれていかはしらの給ふ
宗 小君を空蝉のもとへやると行也
あさましくかしにとりまきかけてそ　細 あやうのかた
見もしるめのきさしくる人さへかきもちすし源をとく
て小君をところ行さるしとかへりまとはるさ

と空蝉のいさめをくるしむるや
人のたうんなしきとあるれはいとなんとあるれ
所 その紀伊のうすと紀伊の妹のいひ語いんとしもあらへん
おとゝもさるとあるれとの詞也
いとうう心行さるれとはいへかうかまへしかんとてもさし
め語　宗 うらうへはとて小君のたゆみや
起るとみきたるをとくえてとの消息ありとひとえをいそてたり
後にとるとて見語ゆうのまぬとか
るすゆつに帳語へうあまる君をとえてくしめ語小君か　源 源氏の君も二の
左右よくるしうわれまへるや
いうた修語をのあされたかるれてやるとさてもあるしなる
をいとほしみてされたるを
須磨（スカヤイ）はいせをの海士の捨（ステ）衣しほなるれたると人やかへらん

後撰に伊尹朝臣女のもとにさぬとたちてとうちにつゝ
かはとてとき　河　かゝりやとある文字ならてなし
細　かゝりやりなきとのはかなのゆれなおけり
みしの事をも物かゝしきちきりしてわかる事にてあり
軒はの荻のゝやまうるを絡と八我法の人の為の絡也
又ある人こともあまたもあれと
古　枕よりまたしるき人ともあらねは忠を源せられあへるもしつる
人まてひらかなのあてなる也　孟　軒はの荻のさまなるを
このみえしてう源の心ならなへきよし契とりをもあしに
ゆともあまれとも有也
この夫のまたあらくにつきてともむかのとかきされと法せう
るとともなしあさましき　河　さまましき　細　若其なる也
思ふ頼ともなくて　孔　源氏のわかりめさぬなりて法也

うるさくともあれそや　軒はの荻のえひそかなぬ人也
ゆかしき心にも物ほかれたる人し　孔　若女子相判の類也
はかなき人をもゆるさゝりしに　孟　空蝉のことをいふ
ゆとあさなるにもはかしぬほとしきと　孔　ゆかしくはしらぬ也
まろうとこまかなるといふるに打れ人あまたなりうれしき
あさくなられさ心ならいふ
万　おのかみ深浅なるにやとみし人をよするのの那
万　さし深のあさくの浅なるに思ふくいとにいかなる物ぞも
あるましきのわかしくいとゝなきく人物あらしねと出ひ
うき多かれとも法にかうまうれうさはうしに
孟　伊予かまるまて秋の夕のさとくなくして源氏につれ
なくるもいしき物をとゝるとうしひ物あらしねとをとし人
されんてとも

羽衣ハ脱すてゝれや世中とおもひしりぬ此頭書といひし
羽衣同空蝉の心乃うち始終此哥の心あり空蝉も衣と
まがはぬ此人乃くとちるを頭書にまかうるさまにてぬ身にて
ほのかにいとみても貞節乃心深して人さまにてぬ身
のかれしさとかや
うつせみのはにをく露のこかくれてしのびしのびにぬるゝ袖かな
人も源氏よりくれさらしせられともいとゞその袖にぬるゝ
露のことく人しれず袖乃ぬるゝよしをいふるすや空蝉の返哥
此哥伊勢集にありと此をもて古来行かし伊勢物語
ことにしめて読たるやうにきこゆる万葉乃哥あまた
ありて後にも山の末にも人みかるの哥など也又頭書に露をと
りたる天河乃哥此下句も古人の哥にこの言葉あり
聞えひと同しのたくひる舟乃うへの葉末乃哥に一同也

隠義の物語ハ言ハれ物乃めあらはしぬ人のあまきほのめかし
かたことゝれぬかんハはすらしぬ身八これも古人の花乃さ
乃哥に五文字の外をかりて文此物語乃るうつくし
きふかひなるも二度まの哥も上白新宮女房集にあり
如此例緒升ゟかりし　細　縁あり　此哥伊勢集乃
哥也何ぞ表記縁り　行　空蝉巻ありとく露を
うちを記無のちるもこなたへし